

〔翻 訳〕

# 日本のチェス

——お雇いドイツ人の将棋論——

ヴィクトル・ホルツ  
細川裕史 [訳]

## I 日本のチェス (ヴィクトル・ホルツ)

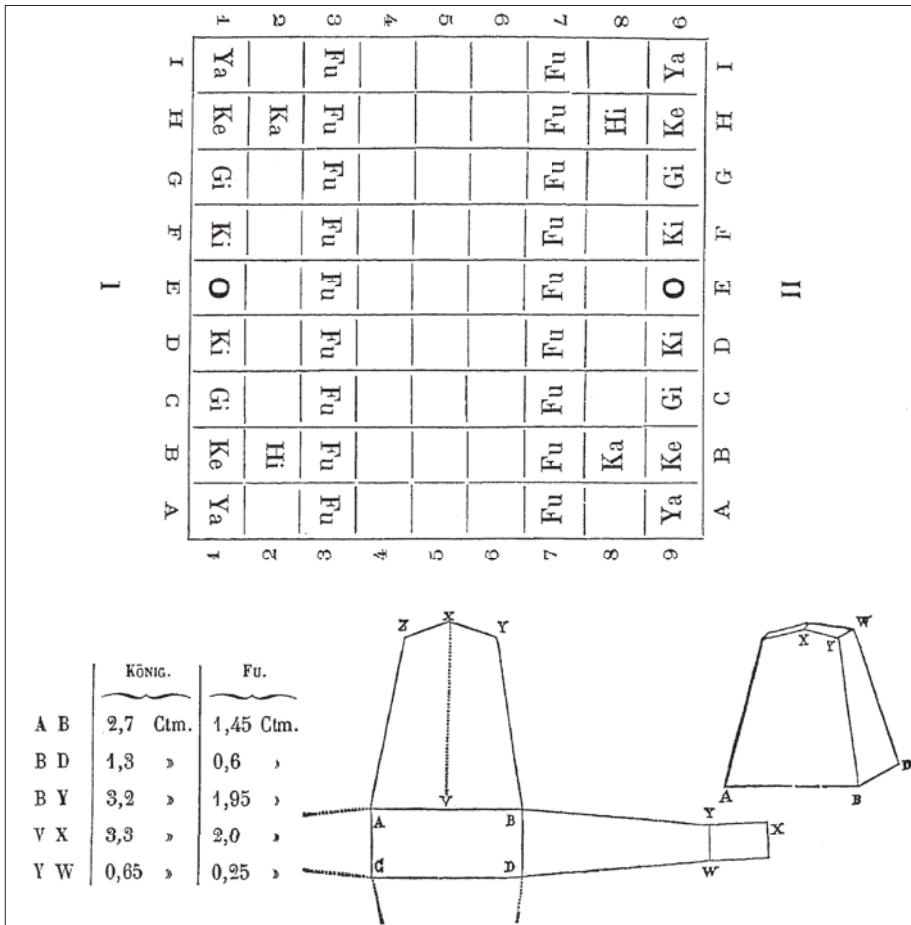


図1 ボードとコマ<sup>1)</sup>

### A. ボード

ヨーロッパ人は、明るい色と暗い色の64マス  
でできたチェス・ボードに親しんでいる。日本

のボードは、しかし、同じ色の81マスできて  
おり、たいていは黄色っぽい色に塗られた板に  
黒い線が引いてあるだけである<sup>2)</sup>。それぞれの

マスは正方形ではなく、コマの形に合わせてやや長方形ぎみになっている。ヨーロッパで、多かれ少なかれ、コマの出来のすばらしさがチェスというゲームの評価に影響しているように、日本ではボードの厚さと節目のないことが重視されている。ボードの長さは36センチ、幅は32センチ。ボードには、10から12センチほどの高さの脚がついている。脚がついているのは、ヨーロッパ人とは違い、テーブルの上にボードを載せるのではなく、床に敷いたマットの上にボードを置いて、その脇に座ってプレイするからである。

## B. コマ

マスと同様にコマも一色しかないが、ボードとの違いが十分に分かるよう、はっきりとした黄色である。マスの数とコマの数の割合は、日本のチェスもヨーロッパのチェスも等しい。我々のところでは64マスに対して32コマ、こちらでは81マスに対して40コマである。コマはどれもクサビ形をしているが、その価値に応じて大きさが異なっている。もっとも重要なコマであるキング[王将]から、もっとも価値の低いコマである「歩」(すなわちポーン)まで、その大きさを上記の表に記している<sup>3)</sup>。しかし、このように似たコマばかりでは、大きさの違いだけでは見間違える可能性があるため、それぞれのコマの上面に、漢字でその名前、すなわちその価値が書かれている<sup>4)</sup>。キングとゴールド・ピース[金将]<sup>5)</sup>以外のコマには、ゲーム開始時に下に向いている面にもうひとつ記号があり、コマが敵の陣地に入ること成功すると、この面を上にすることができる。この点については、「ルール」の項で詳述する。コマは、その狭まり細くなっている方を相手に向けて置かれる、というより、むしろ横たえられる<sup>6)</sup>。こうすることによって、どのコマがどちらのプレイヤーに属しているのかを明らかにする。つまり、ヨーロッパのチェスではコマの色の違いで見分けるが、日本人はコマの向きで同じことをしているのである。

ボードやコマの大きさや色には、細々とした違いがある。とりわけコマの場合、木材の質の良し悪しだけでなく、そこに書かれる文字がていねいに書かれていたり適当だったりという違いもある。そういうわけで、その値段にも差があり、1/2 朱(16プフェニヒ)から1 両(1ターラー 15グロッシェン)以上するものまでである<sup>7)</sup>。

## C. 「王」すなわちキング

初期配置では、このコマは、ボードの狭い方の最終列中央、E1 および E9 に置かれる。「王」は、つねに4つのピース<sup>8)</sup>を従えている。その動きは、ヨーロッパのチェスにおけるキングとまったく同じであり、どの方向へも隣りのマスに移動することができるが、それよりも遠くへ動くことはできない。

ヨーロッパのチェスにおけるクイーンのように自由に動けるコマは、日本のチェスには存在しない。そのため、「王」が置かれる場所は、どちらのプレイヤーにとっても同じである<sup>9)</sup>。

## D. 「金将」と「銀将」

「王」の左右には「金将」、すなわちゴールド・ピースが置かれる。このコマに相当するコマは、ヨーロッパのチェスには存在しない。このゴールド・ピースは、E3から前方ならD4, E4, F4へ、横方向ならD3, F3へ、後方ならE2に進むことができるが、E3からD2, F2へと斜め後ろに進むことはできない。ゴールド・ピースの横に置かれる「銀将」、シルバー・ピース<sup>10)</sup>もまた、ヨーロッパには存在しない。このコマは、E3から前方ならD4, E4, F4へ、斜め後方ならD2, F2に進むことができるが、E3からD3, F3へと横方向に進むことはできないし、E2へと真後ろに進むこともできない。つまり、チェスのキングに比べると、「金将」は2マス少ない動きしかできず、「銀将」は3マス少ない動きしかできないのである。

### E. 「桂馬」と「槍」

「桂馬」は、たんに「桂」とも呼ばれ、我々のナイトに相当する。しかし、「桂馬」は前方向にしか動けず、E3 からなら D5 か F5 にしか動けない。初期配置では、B1, B9, H1, H9 に置かれる。四隅には、「槍」または「香車」と呼ばれるコマが置かれる<sup>11)</sup>。このコマは、我々のルークのように前方へどこまでも進めるが、ルークと違い、横方向や後方へは動けない。

### F. 「飛車」と「角」

「飛車」は初期配置では B2 と H8 に置かれ、「角」は B8 と H2 に置かれる。「飛車」はヨーロッパにおけるルークとまったく同じ性質を持ち、「角」はビショップと同じ性質を持つ。日本のチェスにおいては、この2つのコマがもっとも自由に動けるコマであり、しかも、敵の陣地に入ることに成功すると、さらに価値が高まる。つまり、本来の動きに加えて、「金将」の動きを獲得するのである<sup>12)</sup>。「ルール」の項参照。

### G. 「歩」<sup>ひょう</sup>、「兵」<sup>へい</sup>、「兵」

日本のチェスにおけるポーンはこのように呼ばれており、それぞれ9つある。ポーンは、第3および第7列に置かれる。このコマは、常に1マスだけ前に進むことができ<sup>13)</sup>、しかも、ヨーロッパのポーンが斜め前方の[2つの]マスを攻撃できるのに対し、前方のマスにあるコマのみをとることができる。

### H. コマの動きについてのまとめ

ヨーロッパのチェスでは、非常に大きく動けるコマをプレイヤーは5つずつ使うことができるが(クイーンとルーク[×2]、ビショップ[×2])、日本のチェスでは2つしか使えない(「飛車」と「角」)。ヨーロッパのナイトは、「桂」の4倍も多く動ける。ヨーロッパのポーンは2方向に攻撃できるが、日本のものは1マスしか攻撃できない。したがって、ヨーロッパのチェスと比べてみると、日本のチェスではそれほど急激に相手を攻撃することはできず、興味深い

コンビネーションはあまり生まれまいであろうことは、明白である。ピースの数が多くことと以下のようなルールがあることが、日本のチェスの特色だが、以上の評価に大きな影響はない。

#### 1. ルール

1. 「歩」, 「槍」, 「桂」, 「銀将」が初期配置時の敵陣に入ることに成功すると、そのコマは、それまでの動きの代わりに、ゴールド・ピースの動きを獲得することができる。この変化は、プレイヤーがコマを裏返し、「成る」ということによって成立する。ヨーロッパのチェス・プレイヤーが敵ポーンのクイーンへのプロモーションを警戒するように、この「成る」ことはとても警戒されている。そのため、たしかにヨーロッパのチェスより頻繁ではあるが、日本のチェスでこの言葉を聞く機会はそれほど多くはない。また、ルール上、許されている場合には<sup>14)</sup>、プレイヤーの判断によって、コマを(とりわけ「銀」を)ゴールド・ピースにしないこともある。「飛車」や「角」の場合、上述のとおり、元の動きを失うわけではないので、「成る」ことをためらうプレイヤーはいない。
2. 敵からとったコマは、いつでも空いているマスに置くことができ、自らのコマとして使うことができる<sup>15)</sup>。こうしてコマを置くことは、一手とみなされる。プレイヤーは、対局相手がどのようなコマを使うことができるのか計算にいられておくために、しばしば相手に持っているコマを質問する<sup>16)</sup>。相手からとったコマの使用に関する制約は、同じ文字の列<sup>17)</sup>に2つ目のポーンを置いてはいけない、というものだけである<sup>18)</sup>。たとえば、E3にそのプレイヤーのポーンがある場合、E5にポーンを置くことはできない。また、以下に紹介する対局例におけるプレイヤーIの22手目とプレイヤーIIの22手目が示しているように<sup>19)</sup>、敵陣に置かれたコマは、すぐにはゴールド・ピースとしては

使えず、そのコマが次の手で動いてはじめて昇格することができる。たとえば、プレイヤーⅡの23手目のように。

3. 日本のプレイヤーたちは、一方のプレイヤーがポーンをひとつボードに落とし、もう一方のプレイヤーがどちらの面が上になるかを当てることで、先手を決める<sup>20)</sup>。

私見では、日本人はヨーロッパ人よりもチェス[将棋]をプレイしているようだが、日本のチェス・クラブというものは聞いたこともない。このゲームについて専門的な知識を有しているようにみえるほぼすべてのプレイヤーは、多か

れ少なかれ、自らの経験に基づいてプレイしているのである<sup>21)</sup>。私は、かつての教え子2人に、目の前でこの「戦争ゲーム」<sup>22)</sup>を対局するよう依頼した<sup>23)</sup>。本論の締めくくりとして、その対局を以下に示す。

#### 略記一覧

“O” = 「王」すなわちキング，“Ki” = 「金将」すなわちゴールド・ピース，“Gi” = 「銀将」すなわちシルバー・ピース，“Ke” = 「桂(馬)」すなわちナイト，“Ya” = 「槍」，“Hi” = 「飛車」すなわちルーク，“Ka” = 「角」すなわちビショップ，“Fu” = 「歩」すなわちポーン<sup>24)</sup>。

	プレイヤーⅠ	プレイヤーⅡ
1	F1のKiをG2へ	D9のKiをC8へ
2	G3のFuをG4へ	C9のGiをD8へ
3	B3のFuをB4へ	H7のFuをH6へ
4	G1のGiをF2へ	H6のFuをH5へ
5	F2のGiをG3へ	C7のFuをC6へ
6	C1のGiをD2へ	D8のGiをC7へ
7	C3のFuをC4へ	G9のGiをG8へ
8	D2のGiをC3へ	G8のGiをH7へ
9	I3のFuをI4へ	I7のFuをI6へ
10	B4のFuをB5へ	G7のFuをG6へ
11	D1のKiをE2へ	A7のFuをA6へ
12	A3のFuをA4へ	H7のGiをH6へ
13	C3のGiをB4へ	G6のFuをG5へ
14	G4のFuをG5へ、Fuをとる	H6のGiをG5へ、Fuをとる
15	H2のKaをI3へ、G5を脅かす	H5のFuをH4へ
16	H3のFuをH4へ、Fuをとる	G4にFuを置き、G3を脅かす
17	G3のGiをF4へ	G5のGiをH4へ、Fuをとる
18	I3のKaをH4へ、Giをとる この一手によってIは不利になったが、それでもKaを戻すよりは良い	H8のHiをH4へ、Kaをとる
19	FuをH3に置く	H4のHiをH6へ
20	A4のFuをA5へ	A6のFuをA5へ、Fuをとる
21	A1のYaをA5へ、Fuをとる	FuをA7に置く
22	FuをG7に置き、 H9のKeをG7へ引き寄せる	KaをA1に置く
23	B2のHiをC2へ	A1のKaをG7へ、Fuをとって成る
24	F4のGiをG5へ	H6のHiをH8へ
25	C4のFuをC5へ	C6のFuをC5へ、Fuをとる
26	B4のGiをC5へ、Fuをとる	FuをC3に置く
27	C2のHiをA2へ	G7の成KaをE5へ
28	A2のHiをA4へ	E5の成KaをI1へ、Yaをとる
29	GiをH2に置き、I1の成Kaを閉じ込めようとするが失敗(36手目) このことが敗北を決定付けた	I1の成KaをH1へ、Keをとる
30	A4のHiをG4へ、Fuをとる	C7のGiをD8へ

31	F3 の Fu を F4 へ	Ke を H6 に置く
32	G5 の Gi を H6 へ, Ke をとる	H8 の Hi を H6 へ, Gi をとる
33	Ke を C6 に置く	Fu を G5 に置く
34	C6 の Ke を D8 へ, Gi をとって成る チェック!	C8 の Ki を D8 へ, 成 Ke をとる
35	G4 の Hi を G5 へ, Fu をとる	B8 の Ka を F4 へ, Fu をとる
36	G5 の Hi を F5 へ	Ya を F6 に置く
37	F5 の Hi を F4 へ, Ka をとる	F6 の Ya を F4 へ, Hi をとる
38	Fu を F3 に置く	H1 の成 Ka を G2 へ, Ki をとる
39	B1 の Ke を C3 へ, Fu をとる	Hi を C1 に置く チェック!
40	Gi を D1 に置く	Gi を C2 に置く
	I はここで投了したが, そうでなければ, 以下のような流れになっていた	
41	E1 の O を D2 へ	D1 の Gi を Gi が Hi にとって成る チェックメイト!
41	E2 の Ki を D2 へ	Ki を F2 に置く チェックメイト!
41	Ka を D2 に置く	C1 の Hi を D1 へ チェックメイト!

## II 訳者解説 (細川裕史)

本論文は, おそらくはドイツ語圏に将棋を紹介した最初の論文である Holtz, Viktor (1874): *Das japanische Schachspiel*. In: *Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 1 (5). S.10-12 の全訳である。

2017年から18年にかけて, 藤井聡太の29連勝, 加藤一二三の引退, 羽生善治の国民栄誉賞受賞など, 将棋界をにぎわせる大きなニュースが続き, この日本伝統のゲームに関心が集まっている。しかし, チェスや囲碁とは違い, 将棋の人気は国際的とはいえない。

訳者がボード・ゲームの盛んなドイツにおける囲碁および将棋事情を調査したところ, 以下のことが分かった。囲碁も将棋も, 明治期にすでに, 「お雇い外国人」と呼ばれた外国人教師によって, 同じ『ドイツ東洋文化研究協会会報 (*Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*)』という雑誌で紹介されている。すなわち, 将棋は1874年に本論文によって, 囲碁は1880年に後述するコルシュルトの論文によって。それにも関わらず, ドイツには1980年代末まで将棋連盟が組織されなかった。現在においても, 大都市であ

れば「対局の夕べ」が開催されている可能性もあるが, ドイツ選手権が毎年開催されるようになったのはようやく2012年からで, しかもオープン選手権の一環としての開催という状況である<sup>25)</sup>。それに対し, 囲碁は, 20世紀初頭にはすでに囲碁クラブがつくられており, しかも専門紙まで発行されている。戦後すぐの1952年には「ドイツ囲碁連盟 (DGoB)」がつくられ, 現在では12の地方支部, 2千名以上の会員を抱え, 年に一度のドイツ選手権をはじめとする公式戦を運営している。そして, ドイツ全体では, 約2千の囲碁クラブが存在し, 3万人以上のプレイヤーが存在すると言われている<sup>26)</sup>。

このような人気の違いについては, 囲碁が言語の枠にとらわれないゲームであるのに対し, 将棋をプレイするには漢字の知識が必要であること, そして, 囲碁がヨーロッパに類似したゲームを持たないのに対し, チェスと同系統のゲームである将棋には「チェスの亜種」というレッテルが貼られてきたこと, などが理由として挙げられる<sup>27)</sup>。さらにもう一つ, 両ゲームをドイツ語圏で紹介した人物の熱意の違いを付け加えることもできるだろう。

上述の雑誌に連載された論文で囲碁をドイツで紹介したオスカー・コルシュルト (Oskar Korschelt, 1853-1940) は, 本業は化学者だが,



熱心な囲碁のプレイヤーでもあり、当時日本一の呼び声が高かった村瀬秀甫(1838-1886)に直接指導を受けている。そのためか、ドイツに囲碁を紹介する際には、囲碁の歴史的・文化的背景まで調べ、詳細に論じている。彼の論文はその後、『日本および中国のゲーム「碁」—チェスのライバル (*Das japanisch-chinesische Spiel <Go>. Ein Concurrent des Schach*)』(1881)として一冊の本にまとめられ、ヨーロッパおよび北米に囲碁が広まるきっかけとなった<sup>28)</sup>。それに対し、将棋を紹介する本論文では、コマの動きやルールがごく簡潔に触れられているにすぎない。おそらく、筆者であるホルツ自身は、将棋をプレイしたことすらなかったのではないか。

ヴィクトル・ホルツ (Viktor Holtz, 1846-1919) は、プロイセン王国から日本に派遣されたお雇い外国人であり、ドイツ語教育の専門家として初めて日本人にドイツ語を教えたことで知られている。つまり、彼は、日本におけるドイツ語教育のパイオニアなのである<sup>29)</sup>。

ホルツは、アーヘン近郊のシュトルベルクに銅細工師の息子として生まれ、ケンペンで教員養成のための教育課程を終えると、1867年にアーヘンで教職に就き、1869年からはボッパルト師範学校の教壇に立っている。その後、普仏戦争に従軍。そして、1870年に、「現代語に関する幅広い知識とその他の技能のため」(Rauck 1996: 104) 日本政府から依頼を受けたプロイセン政府によって、3年契約で日本に派遣されることになる。この時の契約では、月200メキシコドルで週6日、1日4時間授業をおこなうことになっていた<sup>30)</sup>。

1871年にホルツが赴任したのは、東京大学の前身、大学南校である。ここでは、すでにドイツ語が教えられていたが、ドイツ語教員としての教育を受けた者はおらず、彼自身の報告によれば、授業のレベルはかなり低かったようである。日本語話者向けの教材もなく、教育方法に関する先例もないなか、専門教育を受けた唯一のドイツ語教員として、ホルツは教育環境の改

善を訴えるが、南校の経済的な事情から状況は好転しなかった。そのため、東京医学校が1873年に教員を募集すると、彼は自らの意思でこのポストに応募している。同校では優秀なスタッフに恵まれ、1875年まで契約を延長し、最終的には月300メキシコドルで1日6時間教えていた。帰国の際には、医学校時代を彼は以下のように回顧している。「日本にいた時期を、真摯に勤めあげたという意識で振り返っている。とりわけ滞在最後の二年間についてはほとんど快い思い出だけを持って帰欧する次第である」(宇和川訳2010: 19)

日本を離れてからのホルツは、かつて働いていたボッパルトに戻り、ドイツ語(国語)、数学、そしてピアノを教えた。当時のエピソードとして、生徒の作文を直している際になんの説明もなく日本の文字を使いはじめた、という奇妙な話が残されている<sup>31)</sup>。ホルツは日本滞在の「最初の六ヶ月間に、生徒たちがドイツ語で学ぶべきものを日本語で身につけた」(宇和川訳2010: 6) というのが、極東で働いていたという自らのエキゾチックな経験を、それとなく示したのだからだろうか。その後まもなく、1877年にプリュームの学校監督官に任じられ、1889年にシュリム、1902年にゲルゼンキルヒェンへの転勤を経験し、1919年にポーゼンで没している。

ホルツが書いた文章としては、自身が担当したドイツ語学級に関する報告書(1872, 1873, 1875)が知られている<sup>32)</sup>。これは、日本における最初期のドイツ語教育の現場を知る貴重な資料である。興味深いのは、ホルツが「ドイツ語は[...]他の科目において知識を得るための手段」(宇和川訳2010: 14)と断じており、他の専門科目と関連づけながらドイツ語運用能力を育成しようとした点だろう。たとえば、世界史に関する文献を読ませることで読解力を、博物学に関する文章を書かせることで作文力を伸ばそうとしている<sup>33)</sup>。このカリキュラムには、当然のことながら、ホルツの教育理念だけでなく、ドイツ語を用いて日本の近代化に貢献できる即戦力の育成を期待する日本政府の意向も反

映されている。実際、ホルツの教え子が教育課程の途中でドイツに派遣されるケースもみられた<sup>34)</sup>。これらの報告書には、ホルツ自身がおかれていた南校での好ましくない教育環境と、カリキュラムおよび教材に関する試行錯誤の過程が記されているが、当然のことながら、チェスや将棋の話は書かれていない。

そのほか、上述の論集に投稿した記事としては本論文のほかに2本あるが、いずれも日本の歌謡に関するもので、これらも将棋やその他の盤上遊戯とは関係がない。異国の歌詞を翻訳し紹介するというのは、いかにも外国人にドイツ語を教えている教師らしく思われるが、どのような動機から翻訳をおこなったのかについては言及がない<sup>35)</sup>。

また、本論文を読んでみても、ホルツは将棋にあまり興味をもっておらず、このテーマをより深く掘り下げようと思っただけという印象を受ける。なにしろ、ホルツによる将棋の紹介はきわめて簡潔で、図版を入れても上述の論集の3ページ弱しかないのである。これに対し、コルシエルトによる囲碁の記事は、同じ段組みで82ページもある。そのうえホルツは、コマの動きに関して、チェスを引き合いに出して低い評価を与えているし、将棋特有のルールにもさほど関心を寄せておらず、持駒のルールなどは混乱を招くものとして否定的にとられかねない描写をしている。こうした点も、コルシエルトがチェスと比較しながら囲碁の魅力を強調していることと対照的である<sup>36)</sup>。

もっとも、ホルツの滞在時期(1871-75)においては、そもそも将棋界自体が低調だった。このことも、コルシエルトとホルツの温度差として表れているのだろう。囲碁界も将棋界もともに、明治期はそれまで続いてきた家元制からの脱却が課題となっていた。1868年に囲碁将棋の家元を経済的に支援してきた江戸幕府が崩壊し、1871年、東京府からの支給を最後に、政府による家元の支援が打ち切られる。ホルツは、まさに家元制崩壊のさなかに来日し、日本を去っているが、一方、やや遅れて来日したコル

シエルトの滞在期(1876-84)は、そうした混乱のなかから囲碁界が近代化に向けて動き出した時期にあたる。

ホルツ自身も指摘しているように、一般大衆のあいだでは盛んに将棋が指されつづけていたものの、専門家に目を向けてみれば、明治初期の将棋界には経済的な基盤も統一的な組織も存在していなかった。こうした状況を、将棋ライターの東公平は「明治は、プロの将棋指しにとっては“暗黒時代”であった」(東1998: 序文)と断じている。その一方で、コルシエルトの滞在期における囲碁界は、村瀬秀甫らが1879年に近代的な組織「方円社」を立ち上げて旧来の家元制度からの脱却を図っており、その一環として外国人にも積極的に囲碁を教えるなど、すでに海外への普及にも力が入られていた。それに対し、将棋の海外への普及は、台湾における日本人学校の教師だった矢野逸郎(1862-1938)がその晩年に台湾や満州でおこなった活動が最初のものでとされているので、大正末から昭和にかけてのことと思われる<sup>37)</sup>。

ようやく8代伊藤宗印(1826-1893)が11世名人になり、将棋界の近代化に乗りだしたのは、ホルツの帰国後、1879年のことである。試行錯誤が続いたこの宗印の時代に、将棋界は新たに新聞社を後援者として獲得し、1880年代以降、次第に人気を回復していく。とりわけ、19世紀末からは新聞に棋譜が掲載されるようになり、将棋人気に拍車をかけた。もっとも、その結果として、後援する新聞社ごとに棋士の派閥がつくられることになり、将棋界の分裂状態は大正末まで続く<sup>38)</sup>。

ホルツが将棋をドイツで紹介したことは、二重に不運だったといえる。なぜなら、紹介者であるホルツ自身が、日本におけるドイツ語教育に専門家として初めて取り組むという大事業のさなかにあり、彼には異国の盤上遊戯を十分に学ぶ余裕がなかったと思われるし、また、たとえ彼にそのような余裕があったとしても、当時の将棋界には外国人に専門的な指導をおこなうのに十分な組織も体制もなかったからである。

彼が1880年代に来日していれば、また違った形で将棋がドイツで紹介されたかもしれない。

ドイツ人の目から見れば将棋と同じく「東アジアのチェス」(Banaschak 2001: xi)であり、将棋と同様に漢字の知識が必要であるシャンチー(中国将棋)には、現在では、中国語話者との「非言語による架け橋」(Xu 2017: 10)、そして「重要なコミュニケーション手段」(Ebd.)との評価がある。将棋もまた、異文化間コミュニケーションの手段として、ドイツ語圏で取り上げられる機会があるのではないだろうか。21世紀の今日では、職務上たまたま日本に滞在しているだけで愛好家でもない人物が祖国に将棋を紹介しなくとも、たとえば岸本齊史によるマンガ『NARUTO』(1999-2014)など、多様な発信源から将棋がドイツ語圏に伝えられており、また、会所を訪れなくともインターネットによって対局機会が常時、提供されているのだから<sup>39)</sup>。

## 注

- 1) Holtz (1874b: 10).
- 2) 著者は、将棋盤の各マス、チェス・ボードのようにアルファベットと数字で表しているが、興味深いことに、アルファベットの列はチェスのように先手側の左端ではなく、将棋と同様に右端から始まっている。なお、当時の将棋では、各マスは漢数字のみの組み合わせで表されており、現代と同様に漢数字と算用数字で表されるようになったのは、昭和初期からである。東(1998: 22)参照。
- 3) チェスでは、キングを除いた各コマの価値が数値で表されており、もっとも価値が低いのはポーンの1点であり、飛車にあたるルークは5点、最強のコマであるクイーンは9点となっている。この方式は現在のドイツ語圏における将棋にも取り入れられており、たとえば、歩が1点、香車が5点、金が9点、飛車が15点とされている。もっとも価値が高いのは、龍王の17点。Vgl. Michels (2014: 46f.).
- 4) コマの名称が漢字で書かれていることは、ドイツ語圏における将棋の普及にとって大きな障害になっている。現在では、アルファベットや記号が表記されたコマが発売されているほか、将棋の入門書では漢字を覚えるための工夫が紹介されている。たとえば、「角」は「一番上に斜めの線があるので、ビショップの動き方だと分かる」、「金」は「大きな屋根の家が金将である」、「銀」は「(左上の)小さな屋根の家が「小さな」銀将である」、「歩」は「想像力をたくましくすれば、大またで歩いている兵士にみえるだろう。とはいえ、どちらのプレイヤーも9つのポーン[歩]を持っているので、このコマを覚えることは容易である」といった具合で紹介されている。Vgl. Michels (2014: 16f.).
- 5) 金将の訳語として、著者は“Goldoffizier (金ピース)”と“Goldgeneral (金将軍)”という訳語を当てているが、訳文では「ゴールド・ピース」で統一した。現在のドイツ語圏では“Goldgeneral”か、“Goldener General (金の将軍)”という直訳が一般的である。Vgl. Banaschak (2001: 14); Michels (2014: 19).
- 6) 著者は、“setzen (置く)”と“legen ([横長のものなどを]置く)”を使い分けている。立像であるチェスのコマとの違いを強調したかったのだろう。
- 7) ドイツに統一通貨が導入されたのは、本論文が書かれた前年の1873年7月である(1金マルク=100プフェニヒ)。それまでは、統一的な通貨がなく、たとえば、ホルツの出身地であるプロイセンでは、1857年以降、「同盟ターラー (Vereinstaler)」と呼ばれる銀貨がおもに流通していた(1ターラー=30グロッシェン=360プフェニヒ)。1ターラーはマルク導入後、3マルクと同等に扱われている。ホルツの滞在時期とは少しずれるが、1881年のデータに基づく試算では、当時の1マルクが6ユーロ40セント(2008年度の試算)ていどの価値とみなされているので、1ターラーは19ユーロ20セントていどの価値だったことになる。したがって、現代の貨幣価値からすれば、安いコマは1ユーロ弱、高いものは30ユーロ前後かそれ以上だったといえる。ドイツ・ブンデスバンク編(1984: 6, 9), Reich der Münzen 参照。
- 8) “Offizier (ピース)”は、チェス用語でキングとポーン以外のコマの総称。「王」が「従えている」4つのピースとは、金銀各2枚を指している。この2種類のコマを、ホルツはチェスにはないコマとみなしている。しかし、その起源をたどると、金将はクイーンに、銀将はビショップに相当するコマである。将棋やチェスの原型となったゲームでは、王およびキングの脇には「斜め四方に1マスずつ動けるコマ」、すなわちシャンチー(中国将棋)の士/仕と同じ動きのコマがあり、それが金将とクイーンに発展し、さらに隣には「斜め四方に2マスずつ動けるコマ」、すなわちシャンチーの象/相と同じ動きのコマがあり、それぞれ銀将とビショップに発展した、と考えられている。木村(2001: 62)参照。
- 9) “Dame (クイーン)”は、飛車と角行を足した動きができるコマ。キングとクイーン的位置は、先手が後手かで左右が異なる。なお、日本にチェス



- を紹介した最初の書籍とされる『西洋将棋指南』(1869)において、「喫霞仙史」こと洋学者の柳河春三(1832-1870)は、クイーンを「妃(きさき)」と訳し、「飛角を合せて一ツにしたるがごとし」と記している。喫霞編(1869)参照。
- 10) 金将と同様に、銀将も現在では“Silbergeneral(銀將軍)”か“Silberner General(銀の將軍)”という名称が一般的。Vgl. Banaschak(2001: 14); Michels(2014: 20).
  - 11) 金将、銀将と同様、チェスに該当するコマのない香車は、「槍」の直訳である“Lanze”と呼ばれている。Vgl. Banaschak(2001: 14); Michels(2014: 23).
  - 12) 成駒の名称について、ホルツは触れていない。現在では、龍王と龍馬は、それぞれ“Drache(-nkönig)(龍[王])”、“(Drachen-)Pferd([龍]馬)”と呼ばれるが、それ以外の成駒は、それまでの名称に“befördert(昇格した)”をつけて呼ばれる。ただし、「と金」のみは、日本語のまま“Token”とも呼ばれている。Vgl. Banaschak(2001: 15); Michels(2014: 24f.).
  - 13) チェスのポーンは、最初のみ2マス進むことができる。このルールは、15世紀末～16世紀頃にヨーロッパに定着した比較的新しいルールである。著者はここでも、将棋よりもチェスの方がコマが大きく動けることを強調している。増川(2003: 111f.)参照。
  - 14) 最終列に歩や香車が進む場合など、それ以上コマが進めなくなる場合には、成る必要がある。ホルツは、こうした細かいルールについても知識を有しているようだが、本論文では触れていない。
  - 15) 持駒のルールは、「日本将棋のみの特殊ルール」であり、「これによって千変万化の無限と思われるような複雑性を可能にさせているのだから、日本将棋の最大の特長に違いない」(木村2001: 202)とされている。このルールの導入時期については諸説あるが、早いものでは1000年ごろに生まれ、それまでの持駒なしのルールと共存しつつ普及していった、とする説がある。木村(2001: 212f.), 木村(2002: 128)参照。
  - 16) 江戸時代には、持駒は文字どおり手に持ってプレイされており、ホルツが紹介しているように、相手に持駒を尋ねることが通例だった。江戸後期から明治にかけて盤の横にコマを置くようになり、駒台が登場するのはいくつかの明末とされている。東(1998: 191)参照。
  - 17) チェスでは、縦の列(ファイル)をアルファベットで、横の列(ランク)を数字で表す。
  - 18) 二歩のルールは、1636年に2世名人・大橋宗古(1576-1654)によって書かれた『象戯図式』において明文化されている。木村(2001)によれば、二歩が可能であればその威力が大きすぎるため、持駒のルールが普及してしばらく後にはもうこの禁止ルールができていた。木村(2001: 291, 293f.)参照。
  - 19) 著者は、チェスの数え方に合わせ、先手と後手それぞれ別に手数を数えている。
  - 20) 「振り駒」についての説明であるが、現在おこなわれているものとは異なる。現在では3枚か5枚の歩を落として、「歩」の面が多ければ振った者が先手になる。
  - 21) 江戸時代初期にはすでに将棋所が設置され、また詰将棋集なども書かれているので、この記述は事実と反する。江戸では湯屋の2階に将棋盤が常備されており、将棋会所のような機能をはたしていた。また、明治初期の東京には大衆向けの会所が複数あり、同好の士が集まっていた。さらに、江戸時代にはすでに『将棋独稽古』(1758)や『将棋綱飾』(1804)などの定跡書も刊行されており、書籍をつうじて将棋の腕を上げることもできた。したがって、ホルツの時代の将棋指しがもっぱら「自らの経験に基づいてプレイ」していたとは思えない。東(1998: 24), 増川(2002: 176), 増川(2013: 157f., 166f.)参照。
  - 22) “Kriegsspiel(戦争ゲーム)”とは、特定の条件下で手持ちの戦力を動かして勝敗を競うこと。とりわけ軍隊における机上演習を指すが、チェスなどのボード・ゲームもこう呼ばれる。
  - 23) 「かつての」と断わっているため、対局者は大学南校時代の教え子かもしれない。数ヶ所に簡単なコメントが差し挟まれていないが、おそらくは対局を披露した学生からの受け売りだろう。ウェブサイト『ネコ印二百科事典』にはこの対局が再現されており、相居飛車で双方ともに居玉のまま棒銀戦法をとっていることがよく分かる。
  - 24) この他に、“n”=「とる」, “N”=「成る」, “bedr.”=「脅かす」という略記があったが訳文には反映していない。
  - 25) 最初のドイツ選手権は1998年におこなわれ、その後、2010年までに8回開催された。オープン選手権は1991年から開催されており、ヨーロッパの選手だけでなく、日本の選手も参加している。とくに第1回から2010年の第19回大会までは日本人の活躍が目立ち、8回(5人)優勝している。一方、ドイツ人は4回(3人)。Vgl. Shogi Deutschland.
  - 26) Vgl. Deutsche Go-Bund.
  - 27) 尾本(2002: 21)参照。
  - 28) Vgl. Korschelt(1881).
  - 29) 以下に紹介するホルツの経歴については、Rauck(1996: 104f.)および宇和川(2010: 2f.)参照。
  - 30) メキシコドルは、幕末期から大量に日本に流入しており、ホルツが日本に滞在していた時期、貿易用の銀貨として流通していた。三上(1996: 250f.)

参照。

- 31) Vgl. Rauck (1996: 105).  
 32) Rauck (1996), 宇和川 訳 (2010), Freundkreis Ome-Boppard e.V. 参照。  
 33) 宇和川 訳 (2010: 14f.) 他参照。  
 34) 宇和川 訳 (2010: 5) 参照。  
 35) Vgl. Holtz (1873); Holtz (1874a).  
 36) Vgl. Korschelt (1881: 1f.).  
 37) 東 (1998: 72, 125f.), 水口 (2001: 176), 増川 (2013: 167), 『日本将棋連盟』「日本将棋の歴史 (2)」参照。  
 38) 東 (1998: 51f, 93f.), 竹村 (2002: 185f.), 増川 (2013: 166, 173f.) 参照。  
 39) 増川 (2013: 203), 『日本将棋連盟』「史上初の外国人女流棋士, カロリーナ女流 2 級」参照。

### 参考文献

- 安藤厚 (1982) 『地質調査所における化学分析の歩み 100年』『地質ニュース』337号, 140-145ページ。  
 宇和川耕一 訳 (2010) 「教師 V. ホルツの江戸におけるドイツ語学級に関する報告書」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』28号, 1-20ページ。  
 尾本恵市 (2002) 「将棋という日本文化」尾本恵市編著『日本文化としての将棋』三元社, 20-38ページ。  
 喫霞仙史編 (1869) 『西洋将棋指南』中外堂。  
 木村義徳 (2001) 『持駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟。  
 木村義徳 (2002) 「駒型と持駒使用」尾本恵市編著『日本文化としての将棋』三元社, 116-132ページ。  
 竹村民郎 (2002) 「棋士集団の誕生」尾本恵市編著『日本文化としての将棋』三元社, 179-194ページ。  
 ドイツ・ブンデスバンク編 (1984) 『ドイツの通貨と経済 1876～1975年 上』(呉文二・由良玄太郎監訳) 東洋経済新報社。  
 東公平 (1998) 『近代将棋のあけぼの』河出書房新社。  
 増川宏一 (1996) 『碁打ち・将棋指しの誕生』平凡社。  
 増川宏一 (2002) 「江戸時代の将棋」尾本恵市編著『日本文化としての将棋』三元社, 164-178ページ。  
 増川宏一 (2003) 『チェス』法政大学出版局。  
 増川宏一 (2013) 『将棋の歴史』平凡社。  
 三上隆三 (1996) 『江戸の貨幣物語』東洋経済新報社。  
 水口藤雄 (2001) 『囲碁の文化誌』日本棋院。  
 Banaschak, Peter (2001): *Schachspiele in Ostasien. Quellen zu ihrer Geschichte und Entwicklung bis 1640*. München.  
 Holtz, Viktor (1873): Zwei japanische Lieder. In: *Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 1 (3). S.13-14.  
 Holtz, Viktor (1874a): Japanische Lieder. In: *Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 1 (4). S.45-47.  
 Holtz, Viktor (1874b): Das japanische Schachspiel. In: *Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 1 (5). S.10-12.  
 Korschelt, Oskar (1881): *Das japanisch-chinesische Spiel <Go>. Ein Concurrent des Schach*. Yokohama. (=コルシエルト, オスカー [2018]『碁の理論と実践』[高嶋秀明監, 細川裕史訳] 飯塚書店)  
 Michels, Stephan (2014): *Shogi. Schach der Samurai. Einführung in das faszinierende japanische Schach*. o. O.  
 Rauck, Michael (1996): Victor Holtz and the "German School" in Tokyo. In: *Okayama economic review. The Journal of the Association of Economics*, 28 (2). S.99-126.  
 Xu, Tian long (2017): Vorwort des Großmeisters Xu Tian long. In: Dieter Zithen: *Xiangqi. Regeln und Taktik des chinesischen Schachs*. 2. Aufl. Gröbenzell. S.9-12.  
 『nikkei4946.com』「将棋ブーム再び到来～プロ棋士について知る」(2017.12.18) <https://www.nikkei4946.com/zenzukai/detail.aspx?zenzukai=210> (2018.7.16 閲覧)  
 『日本将棋連盟』「史上初の外国人女流棋士, カロリーナ女流 2 級. NARUTOで将棋を知り, ネット将棋で腕を磨く【カロリーナ女流 2 級紹介前編】」[https://www.shogi.or.jp/column/2017/03/post\\_115.html](https://www.shogi.or.jp/column/2017/03/post_115.html) (2018.10.10 閲覧)  
 『日本将棋連盟』「日本将棋の歴史 (2)」<https://www.shogi.or.jp/history/story/index02.html> (2018.7.16 閲覧)  
 『ネコ印二百科事典』「お雇い外国人ホルツと将棋」<https://sites.google.com/site/2hyakka/shogi/holtz> (2018.7.16 閲覧)  
*Deutsche Go-Bund*: <http://www.dgob.de/> (2018.7.16 閲覧)  
*Die OAG. Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*: <https://oag.jp> (2018.7.16 閲覧)  
*Freundkreis Ome-Boppard e.V.*: Bericht des Lehrers Viktor Holtz: <https://ome-boppard.de/bericht-des-lehrers-viktor-holtz/> (2018.10.22 閲覧)  
*Reich der Münzen*: Die deutsche Währungsgeschichte: <https://reichdermuenzen.hpage.de/deutsche-waehrung.html> (2018.10.16 閲覧)  
*Shogi Deutschland-Die Gemeinschaft der Shogi-*

*Spieler in Deutschland*: <http://www.shogideutschland.de/> (2018.7.16 閲覧)

*Shogi.net*: <http://www.shoginet.de/> (2018.7.30 閲覧)

(2018年11月23日掲載決定)